

「今岡崎のまち育ては面白い ～人もまちも元気になる極意～」

愛知産業大学大学院

教授 延藤 安弘



なんかどっち向いて話ししたら良いんかわからへんみたいな並び方がなっておりますけれども、ご紹介いただきました延藤でございます。大阪、関西に長居しましたので今もって関西弁が抜けませんので、時々皆さん方の耳元にお聞き苦しい言葉を発するかもわかりません。いただきましたテーマ、且つこの場は言うまでもなく岡崎学なんですけれども、今紹介していただきましたように、また岡崎に来てほんの数年、3年ぐらいでございますので、皆さん方の方が岡崎について熟知しておられるよそ者が、何を言うんやろということになるうかとか思いますけれども、どうぞ皆さん方から色々ご質問、ご意見をいただいて学ばせていただきたいところ思っておりますので、よろしくお願いいたします。

1. なぜ「まち育て」か

まちづくりという言葉が最近では流行っておりますけれども、表題に上げましたのは「まち育ては面白い」という、なんでまちづくりと言わんとまち育てなんやろと訝られる方がおられるかもわかりません。ところでいきなり皆さん方の心の中を覗かせていただく失礼をお詫びしつつ、質問を発するわけでございますけれども、まちづくりという言葉は日本語において何時生まれましたか。1960年代以前からあったところ思う方はグー。それいけどんどの時代に生まれたやろと思う方は、60年代70年代とこう思う方はチョコキ。岡崎市をはじめどこへ行ってもこの頃は、まちづくり、まちづくりと言い寄るさかいに、近年10年ぐらいの言葉であろうと思う方はパー。隣の人の顔なんか見んとパッとこう挙げましょう。まちづくりという言葉は日本語において何時生まれましたか。60年代以前からあったところ思う方はグー、60年代70年代とこう思う方はチョコキ、近年だと思ふ方はパー、一斉にどうぞ。今野鳥観察の会のメンバーが数えておりますけれども、まずグーの方は下ろして下さい。パーの方下ろして下さい。このチョコキの10人ぐらいの方が正解でございます、帰り事務局からお土産が出るかどうかは分かりません。

振り返りますと1960年代初頭に、名古屋は栄東という栄のちょっと隣の地区で、あの頃名古屋は戦災復興土地画整理事業を延々とやっております、時代の流れの中で車のために道路は広げんといかんという事になりました。布団屋の三輪田さんというおっちゃんをはじめ住民達は、時代の流れの中で道の拡幅はしょうがないけれども、建て替える時にお隣りと建て替えるぐらいでは良い町にならん。165ヘクタールという中学校区の広がり未来私達はこんな町に住んでみたいとこう思う、住民が思い描く町の将来像をみんなで考えよう。行政も専門家も一緒に考えようねという、この活動の中で生まれたのがまちづくりでございます。まさにまちづくりの時代と言われている現代にあって、全国に発する、この中部圏で始まった、しかも住民が自らの町は自らで守り育

もうという、そういう思いのこもった言葉がまちづくりでございます。しかし10年程前に政道用語になった事がございまして、まちづくりは行政の方々が従来の都市計画や公共事業の堅さを柔らかく住民に伝えたいという思いのあまりに、何でもまちづくりまちづくりという傾向がございまして、駅前再開発も区画整理事業も時には鉄道高架事業も何でもまちづくりという言葉が流行りすぎまして、住民の所に行って、この頃まちづくりって何ですかとこうマイクを傾けてみましたら、あれは行政がやるものでしょうという答えが良く返ってくる機会がございまして。

言葉というものは時代の流れの中で新しい表現を獲得していくものでございましてけれども、そういう意味でまちづくりは行政主体で固い物をつくっているというイメージは何となく初発のまちづくりの言葉の意味することから離れていっているのではないかと。まるで子供が育まれるように我が岡崎、我が町も個性ある姿を持って育てよう。合わせてその町を育む事に関わる活動に関わる市民、私達一人ひとりがより良く生きるという生き方を育てよう。人も町も育まれていく。これを「まち育て」と呼んでいるわけがございまして、始まりのまちづくりの意味が住民達が自分達の町は自分達で守り育てようという、この意味を現代的な言葉として「まち育て」とこう呼んでいるわけがあります。いただきました「岡崎の町育ては面白い」という話を、今日はこのようなつまらん話で終始するのは大変もったいのうございまして、「幻燈会」というやり方で事を進めてみたいと思います。

2. 幻燈会（燈の向こうに幻を見る）

幻燈というと「えらい古い事を言う奴だな。」と、「この頃はスライドというもっと恰好良い言葉があるやろう。おまけにパワーポイントという最新兵器をお前よう使わんのか。」って、はい、まだよう使いませんで、今もってスライドプロジェクターなる古いものをこう使っております。スライドいいますと、英語でコマが横に滑るという機能的、機械的な言葉でございまして、お手元にお届けをしております、このプログラムの幻燈という文字を見ていただきますと、燈の向こうに幻を見ると書きまして、「まち育て」とか「岡崎は今面白い」とかほんまかいなとこう言えるような話を燈を見ながら幻が見れるとすればこれは意味のある言葉やんかという事で、私は敢えて幻燈という言葉大事にしながら、皆さん方を幻燈会のひとときにお招きしたいとこう思うわけがございまして。とはいうもののいきなり幻燈会というのも些か唐突でございまして、どういう視点に見定めて今日のオリジナルプログラムを組んでいるか、一言二言触れておきたいと思っております。

最初は一冊の絵本から始めます。「なんや我々大人に向かって絵本なんか見せやがって、お前馬鹿にするんのやったら帰ってくれ。」と怒られる方がおられるかもわかりませんが、僕は住民参加のまちづくりは30年時を掛けて関わっているわけがございましてけれども、最初の10年ぐらいは大学の教師らしく物事の定義や歴史から始めておりました。みんな寝はりました。外国調査した時に会った優れたまちづくり絵本のある日お見せいたしましたら、みんな身を乗り出して聞かれました。絵本の世界が実現

するんやったら私らやってみようという事で、それ以来私は住民と対話を持って「まち育て」を進めていく活動、初めの一步は必ず絵本からという事にしております。今日もその経験か絵本の一冊を紐解いてみたいと思うわけでございます。

今日は岡崎中心のお話に心掛けたいと思いますが、ひとつ私達、「まちの縁側を育みたい」ということで、名古屋の町の片隅で捨てられていた歯医者さんの建物を「まちの縁側」と称して活用している事例をちょっぴり紹介をしながら、岡崎にも「まちの縁側」の発想を機会あるごとに広めてみようという思いをお伝えしたいと思います。

3番目は去年11月岡崎まちづくりのお祭りがございましたけれども、あの時に「ジャズストリート」という極めてたぐい稀なる素晴らしい感動の空気が岡崎のまちに流れました。「ジャズストリート」の様相を私は端でこう見て、これは世界で一番面白い、新しい表現と人の気持ちを高める事とまちのあり方をみんなで楽しみながら希望を語り合える優れた活動ではないかという事を大変共感をいたしました。この「ジャズストリート」を皆様方と共に歩いてみたいと思うわけでございます。

4番目はこの地区全体が康生地区でございますけれども、この建物のすぐ近く、お城の北に図書館交流プラザ、皆さん方の投票によって、「ライブラリー」と「リバティー」から自由に市民の思いを発し、豊かな町にしようよという、そういう思いを込めてつけられた「リブラ」が今日建設中でございます。この「リブラ」は3年前市民の方々が集まられまして、主にこの会場でやっていたんでございますけれども、最初は行政に対しての強い批判から始まり、やがて集まれる市民同士で私達の町は、私達で育もうというまち育ての発想を進めながら、対話を持って大規模なる公共施設設計に敢然と市民主体で望まれたわけでございます。そうした「リブラ」の設計過程に市民が身を乗り出す事を通して、どのように形作られて行ったか、単なる形の世界だけではございません。これを通して市民の意識の向上という所も極めて注目すべき中身をはらんでいるわけでございます。そこでこの「リブラ」の設計過程、南部地域交流センターも市民参加でやったわけでございますけれども、あまり公共施設設計の市民参加の場面が多すぎるのも重たございますので、それはちょっと横に置いておきます。南部地域交流センターは既に竣工し、華々しい子供やお年寄り達の活用の場になっておりますので、是非市民参加の成果の現場、南部地域交流センターをご覧いただきたいと思うわけでございます。

さて今ひとつ進行中のプロジェクトで、矢作川というこの地域が誇る優れた川がございますけれども、その川縁、大門河川緑地を子供参加、住民参加で設計しようという事で、お年寄りから子供まで身近な環境、特に自然も文化も歴史も暮らしもみんなええものにしようねという、地域の宝を未来に継承しようねという、そういう発想を持ってワークショップ、行政に対して批判がましい話をするだけとか、あれやれこれやれと要求するだけという従来のやり方ではございませんで、一人ひとり自由に発言をしながら提案に至るといったやり方を今日ワークショップと呼んでおりますけれども、このワークショップの現場を康生「リブラ」とそして大門緑地河川公園の二つをご覧に入れたいと思うわけでございます。いずれも機会を得まして私が端で一緒させていただいておりますので、その様相を映像を通してお示し、広い岡崎でこんな面白い事がぼつぼつ始

まっているんかいな、これは面白いなという所をくんでいただければと思います。

最後に、岡崎の学生達が身を乗り出して地域の中に関わり、学生と市民が交流し自分達の学びの場であると共に営みの場を豊かに紡ぎだそうとしています。つい先だって年末に「コミュニティーデザインリーグ」という名前でもってシビコの6階で発表の場を、公開審査を伴いながら行いました。最後にちょっぴり若者達と市民の出会いの場をもって岡崎元気を未来に向かって発信しようという、そういう現場を垣間見てみたいと思っております。いただきましたお時間があんまりございません。過剰なプログラムを組んでおきまして、既にお気づきのようにならざる、ちょっぴり、ちょっぴりどころか「えらい早口のおっさんやな、もっとゆっくり喋らんかい。」とご批判をいただく所でございますけれども、いただきました時間の中におさめんといけませんので、少しお許しをいただきますまして、早速これから始めてまいりたいと思います。という事で一冊の絵本から始めてみたいと思います。

『幻燈会スタート』

1冊の絵本から

イギリスのブライアン・ワイルドスミスという作家はユーロトンネルが出来た時に一つの絵本を作りました。早速表紙を開けてみますならば、ロンドンに住むマークスというモグラ君が主人公でございまして、パリに住むピエール君にある日手紙を書きました。「僕は兼ねてからあなたの国に行ってフランス料理を食べたい。エッフェル塔に登りたい。」そこでフェリーに乗って行こうとしたら、人間が「モグラはフェリーに乗ったらいかん。」と降ろされてしもうた、どないしたらええんやろう。手紙を一通したためましてドーバー海峡に浮かぶ便に託しながら、やがてこのお手紙はパリのピエール君の所に届いたわけでございます。ピエール君は早速返事を書きまして、「僕もあなたの国に行って二階建ての赤いバスに乗りたい。」というのを夢にしている。そこで一案やけれども、お互いの海岸縁に出て海底深く掘り進んでみよう。お手紙を書くと共にコンピューターに向かっていっぱい図面を作り、パリのピエール君はロンドンのマークス君に図面をいっぱい送りつけたわけでございます。早速イギリスのモグラ君は海岸縁に出まして測量図を持って測量を始めた所に、テクノラットというネズミが登場致しまして、このネズミ君が言うには「この図面は間違ってるからやめとけ。」とこう言うわけでございます。ところでテクノラットというのは高度に発達した文明諸国ではテクノクラシーという我々固い頭の技術者の事を揶揄する言葉として、テクノラットとこう言うているわけでございますが、周りの住民とおぼしき動物達は「テクノラットの言う事なんか聞かんと楽しい事をやってたら夢が実現するで。」と励ましてくれまして、励ましに応じて海底に向かって掘り進んで行きましたら、やっぱり軌道がちょっぴり間違っていたらしい。海のロブスターや魚たちは「おいおい間違ってるやんか、もっと深く掘らんとあかんで。」と助言してくれまして、その助言に従ってどんどんどん深く掘り進んで行きましたら、とある所で宝物とこう出会いました。宝物を売り飛ばして最新兵器の掘削機をもってモグラ君は掘り進んでいったわけでございます。モグラという存在がこのように機械をもって掘り進んでいくというユーモアあるシーンが出てくるわけでございますけれども、どんどんどん掘り進んで行きましたら、とある所でモンスター集

団、化け物集団に通せんぼを食らわされたわけでございます。化け物達と言うには「これは俺の領土だ。先に進みたければ大枚はたいていけ。」とこう言いました。モグラ君はもう最新兵器の掘削機を買ってしまいましたので一銭も一円も持っておりませんでした。困ったな。困ったときにはひきつけて戦うべしというあの市民活動のモットーを思い出したモグラ君は、「そうだダーツをやろう、ダーツをやって勝ったら通してくれ。」とこう提案したわけでございます。ダーツと言えばイギリスの国民が毎日遊んでいる遊び道具でございますけれども、イギリス国民の片割れのこのモグラ君はモンスター集団を打ち負かし、さらにどンドンどンドン掘り進んでいきましたら、とある所で穴がポカッと空いてパリ側のピエール君の姿が垣間見えたではございませぬか、お気づきのようにこの絵本の左右にはダイヤルが付いておりますので、このダイヤルをグルッと廻しますと中の絵柄が変わるわけでございます。廻してみますならば何とこのようなパリ側のモグラとロンドンのモグラ、肩を抱き合っているわけでございますけれども、下の文章には必ずその書いていない言葉ではございますけれども、僕はこれを見て、住民参加のまちづくりは夢が実現するんやね。二人は肩を抱き合っているようにも思えるわけでございます。更にダイヤルを廻してみますならば、とうとうイギリスのモグラ君はフランス料理に舌鼓をうち、エッフェル塔に登る事が出来、凱旋門を愛でる事が出来たわけでございます。

下の文章を読んでみますと、この先更に進みたければ一回絵本を閉じて逆さまにして読みなさいと書いてありますので、そのように致しますと、なんと今度フランス語のトンネルという絵本になるではございませぬか。フランス国旗を持ったモグラ君が表紙を飾っているわけでございます。早速表紙を開けてみますならば先ほどの冒頭のくだりと一緒でございます。イギリスのモグラ君から一通の手紙を受け取ったフランスのモグラ君は返事を書くと共にコンピュータに向かっていっぱい図面を書き、イギリスのモグラに送りつけると共に、自らもフランスの海岸縁に出て穴を掘り始めたわけでございます。そこに登場したのはテクノラットというネズミであると共に、フランスには何とビューローラットというネズミも登場致します。ビューローラットというネズミが言うには累々と積み上げた書類に、「これに全部判子付いてくれん事には先へ進んだらあかん。」というこういうわけであります。ビューローラットというのはビューロークラシーという官僚制を意味する言葉を揶揄してビューローラットというネズミにしているわけでございますけれども、役人の事を揶揄しているわけでございます。ここで一言小さなコメントを付則しますならば、決して岡崎市の役人がビューローラットというわけではございませぬ。この町の役人の方々は極めて心厚い市民との対話の心を持っておられる方々でございます。後ほどもう一つのキーワードが登場するわけでございます。やがてフランスのモグラ君はイギリスのモグラ君と同じような冒険を続けながらとうとうロンドンのモグラ君に案内してもらいながら二階建ての赤いバスに乗ると言う夢が実現したわけでございます。美しいカントリーハウスを愛でる事ができ、ロンドンブリッジを渡る事が出来ました。この先更に進みたければこの絵本を閉じて逆さまにして読みなさいと書いてありますので、そのようにこう致しますと、また英語のトンネルの絵本に戻っていくわけでございます。3歳から90歳までのあらゆる人間の心を捉えて

離さない。このワクワクドキドキの仕掛け絵本の今日のテーマに向かって語っている事は何か。“遊び心を持って企てよう” 現実には極めてドロドロした難しい状況が待ち受けているわけですが、それを知恵だけではなくて遊び心という人間が内に隠し持っているもう一つの宝を活用しようではないか。合わせてテクノラットやビューローラットという現代社会に蔓延している傾向を超えて、むしろデモクラットというデモクラシー、お互い対話を楽しむ人として市民も行政も専門家も、最初はお互い違和感を感じる変な奴やなあという感情からこう始まりますけれども、やっているうちにお互いに「エーッ、技をもっとやるんか、ええ考えしてるんか。」という、“お互い仲間と見なし合うデモクラットになろう” そんな呼びかけがこの絵本の側から発せられているように思うわけです。さてこうした絵本の指し示す所を現実のまちづくり、まち育てに着手させている現場をこれから時間の許す限り巡り歩いてみたいと思うわけですが。

まちの縁側育み隊

まずは「まちの縁側MOMO」という名古屋は東区、国道19号線に寄り添う幹線道路、毎日車がビュンビュン行き来し、周りはマンションが連立する中、60年前に建てられて木造家屋で歯医者さんが15年前に亡くなられて空き家となって捨てられようとしておりました。一網打尽駐車場になる寸前、4年前私達の町の「縁側育み隊」というNPOがスタートした時、居場所を見つけようとしたその時に出会ったのがこの木造の捨てられようとしていた空き家でございます。ここに幸いにも居場所を見つけて「まちの縁側モモ」をこしらえようとなりました。入った時には天上は真っ黒。白く塗り上げ、床はボロんちでございましたけれども、やがて朝日が遊びにやってくるような気持ちの良い居場所に変えていったわけでございます。技巧室の棚をとって小さな天板を作り、そして流しの陶器をくり抜いたものが入口に入ろうとする所に看板が掛けられておりました。捨てられようとしていた建物がよみがえると共に消えぬ新しい命が付与されているのでは無かろうかというふうに思えるわけでございます。ちなみにMOMOというのはミハエルエンデというドイツの児童文学者が書きました「MOMO」という作品にちなんでおります。あの作品に出てくる物語は、困っている人の言葉に耳を傾けているモモの姿、やがてモモに話していると困っている人の心が晴れ渡る。そういう場所でありたいね、ここに集まった市民達はそんな語り合いからモモというネーミングを選んだわけでございます。石川さんは子育て真っ最中、忙しいお母さんでございますけれども、時間があればNPOのメンバーが夜会合にやってくる時、ご飯を作って持ってきてくれます。そのご飯が毎回メニューの違う美味しいものでございまして、みんなはキッチン石川とこう呼んでいるわけでございます。こうしてお腹を温めながらやがて夜の会合に臨んでいくわけですが、この場所及びお隣のお部屋もお借りしながら月2回程縁側サミットが開かれております。縁側サミットというのは色々な女性達が集まりまして、捨てられていく生地や着物地を持ち寄ってミニ着物作りという、いわば裁縫製作活動でございます。私が死んだ後にこれは捨てられていくのは忍びない。生きているうちに美しいものに変えようという活動でございますけれども、初めてこの「まちの縁側サミッ

ト」で出会ったお年を召した方々でございます。教えあえっこをしております。まるで10年の知己の如き仲の良い関係が見られるわけでございますけれども、現代社会はバーチャルリアリティというええ加減な情報が飛び交っているわけでございますけれども、バーチャルリアリティを超えてバーチャンリアリティこそほんまもんやでというそんな発想が遊び心を持ってみなぎってくるわけでございます。やがてこうした作品は単なる趣味の世界に閉じているのではございません。ギャラリー化したこの無の空間にはこのように美しいミニ着物が飾られたり、あちこちにお届けされたりするわけでありませぬ。道行く人々、特に外国人には「何や何や、日本の昔ってええ暮らしの文化があったんやね。」と誉めてくれるわけでございますけれども、時には一品持ち寄りパーティーをしながら食べるという人の内側から豊かさがこみ上げてくるようなコミュニケーションの場が「まちの縁側」として広がろうとしていくわけでありませぬ。NPOのアキメンバー、今愛知産業大学大学院の一年生であります、ナバちゃんのお父さんが雑木林にいて小枝細工しているというのが茶飲み話の場でも出まして、それやったら今週はお父さんの小枝遊び展やってみようという事になりました。この場所のオーナー、持ち主のカチさんでございまして、愛犬ココ、ココは好奇心旺盛な犬でございまして、今日は何をしてはるんやろう。中に入ってくるわけでございますが、ココに誘われて内部に入ってみますならば、雑木林の葉っぱも年寄りも犬も若者も、生きとし生けるものもみんな繋がりがあって生きる。そんな繋がりの中で豊かな町を育てよう。いわば「まちの縁側」の理念は、このように固い言葉から始まるのではなく、活動をもって緩やかに人々の心の中に何のためにやっているんやという事が、気持ちが伝わりあっていくわけでございます。それにしてもあまり狭苦しい所でございますので、裏の捨てられていた物置空間をパソコン空間、事務所空間にしようという事になりました。その時大工さんの柘植さんは「小さな縁側を作ったらどうや。」という提案をしてくれたわけでございます。その際柘植さんは毎日半田から1時間半、名鉄と地下鉄を乗り継いで、道路上は電動車いす、スピード違反と検挙されるような速さをもってやってくる大久保ヤスオさんのために、手摺をあしらってくれたわけでございます。お気づきのように見分けが活用されておりまして、堅苦しい握り棒ではございません。細部に心のこもった作りがされていったわけでありませぬ。ささやかな縁側が出来ますと当時「NPOまちの縁側育み隊」の事務局長であったタケちゃん、若き事務局長でございますけれども、情熱的に市民活動に先進するが余り24時間労働も辞さない。時には48時間労働もやるという、このしんどい仕事をしてきたタケちゃんの前に縁側が出来ますと、未来が開かれ始めたわけでございます。ある日このような未来を約束するうような出来事が待ち受けていたわけでございますが、その端で見入っているココは哲学的な表情を持って「縁側というものは偶発的な出来事を惹き付ける場所であり、偶然性を味方にする事がより良い生き方である。」という縁側の生き方を無言で周りの人々に語っていたわけでございます。なんでか縁側が出来、ココがここにおると幸せな出来事が次から次へと起こっていくんであろうかと不思議に思っておりましたら、ふと気が付きますと何とココのお腹にはしっかりハートマークが先天的に記されているではございませんか。こいつは生来この世に生を受けてからずっと縁側犬として生きる事を目指していたのではなからうかというふうに思え

たわけでございます。今日は道端の草花を摘んできて、子供達や大人達が一緒に押し花づくりをしようという事で、子供達がよそのおばちゃん達に、「あんた構図が上手い、色遣いがええわ。」と言われている中で、「そうやこれで生きてろう。」みたいな生きる力の一端が心の中に芽生えはじめていくわけでございます。ご近所の奥さん方は何がおかしいのか笑い炸裂空間でございまして、このように町の縁側とは笑いが、そして微笑みがなんとなく広がっていった、あそこに行けば何かええ事に出会えるかもわからへんというかつてあった縁側、訳あって今日失せてしまったわけでございますけれども、人と人の関係が切れ切れになっている現代社会にあって、もう一度「まちの縁側」の発想を広げてみようというのがこの「まちの縁側MOMO」でございます。

日付を見ますと阪神大震災 10 周年を前にした日でございますけれども、地域の人々は空いた瓶とサラダオイルを持ってきて、ほのぼのの灯りを拵えて、震災で亡くなられた方々の霊を慰めると共に、この地域に安心安全が長続きにして欲しいというささやかな祈りのセレモニーが行われたわけでございます。ユウナちゃんは先ほど背後に建っております高層マンションにお父さんの転勤の為にやってきました。お母さんもユウナちゃんも友人が無かったわけでございますけれども、足下に「まちの縁側」があるという事を知ってからはお母さんとユウナちゃんはよくやってきました。お母さんが言うには、「ここにやってくると新しいお母さん、新しいおばあちゃん、新しいお姉さんと出会える。この場所が私達にとっての安心感を与えてくれる所です。」とユウナちゃんのお母さんは語っているわけであります。中庭では時には音楽会が行われたりし、ご近所の方々がお金を払って音楽会に行くのではなくて、無料で気持ちの良いメロディの耳を傾ける。そして地域における人としての関係を楽しみながら、つなぎ止める地縁の繋がりを強化するとともに、若者達は建築は単なる物の世界として学ぶのではなくて、人との対話、市民とのコミュニケーションの中で何を指すんやという理念やコンセプトを命のように大事にしながら、それを形にしていく。そのような志を持ってこの「NPO まちの縁側育み隊」に関わってくれているわけでございます。これからの地域、まちをより良く育てていく為の重要なきっかけは、地縁の関係という従来の繋がりと志の縁で繋がるという、この地縁と志縁を結び合わせる仕掛けが、地域が変わろうともテーマが変わろうとも、重要な創造的な育ての方法に繋がっていくのではなかるうかという事がここでは語られているように思うわけでございます。

岡崎ジャズストリート

さて、私達は名古屋から目を岡崎に転じて「ジャズストリート」のあの華やかな音楽が町の中に流れるシーンに目を移してみたいと思うわけでございます。昨年、岡崎市がスタートしてから 90 周年を記念して、あの「ジャズストリート」が行われました。皆さん方が町を歩かれた通りでございますので、敢えて私をご紹介するものではございません。しかし私の目線から岡崎はかくも美しいのではないかと、岡崎とはこのように解読出来るのではないかと、あの「ジャズストリート」を共に皆さん方と歩きもって、岡崎の都心の界隈を魅力の一旦に触れてみたいと思うわけでございます。お気づきのようにシビコの建物のコーナーから康生通りがはしる所を路上あるいは公園

などなどで、たくさんのジャズミュージシャンが演奏を繰り返していたわけでございます。康生通りを東の方に目を移していきますならば、花もそして人々の気持ちの良い歩きゆかれる姿が浮かぶと共に、捨てられていた建物が、先ほどの「まちの縁側」ではございませんけれども、若者達によって新しいお店やさんに姿を変えようとしているわけでございます。その前をゆっくりと歩いて行かれるお年寄り、若者のデザインした多分バイクの部品などを売っているお店やさんが、看板の字のアースカラー、そして白い看板を掲げながら、両側の建物に着眼をしてみますと、この右側はもう閉店になってしまったうどん屋さんでございますか。しかしこのうどんを飾っていた陳列棚は綺麗に蓋されているわけでございますが、蓋と汚らしいクーラーがマッチングしているという、この奇妙なマッチングの世界が道を歩いていると気付くわけでございます。細部に心がこもっているようなデザインという点では若者がデザインした所は黒い壁と、そしてうがたれた窓の形が何と恰好良いんでございましょうか。そして白い壁が凜と影を受けていると共に、お年寄りが作ったこの白い壁面と若者が作った白い壁面が、若者もお年寄りも岡崎の町は白で行こうみたいな、そんなセンスが何となくお隣同士で繋がっているわけでございます。このように康生通りの一つの基調は美しい、清々しい白であるという事に私は気付いたわけでございますけれども、そうした視点を持って町を歩き始めますと、ヤマハならぬ山田さんのハンドバック屋さんでは、キーボードを構えながら歌っている人が居られるわけでございますが、こうして見ますと一見灰色、或いは茶色っぽい建物が目立つ景観の中で、この通りは白が美しく連続しているという事に気付くわけでございます。そして更に東に方をとってみますならば、電波堂の壁面もこのように白くなっておりまして、丸いこう優しさを湛えていると共に、やがてこの通り、筋にはジャズミュージシャンがトランペットを朗々と吹き鳴らし、道端に休みながら、そして立ちながらこの演奏に耳を傾けておられるわけでございます。こうした白を基調にしたながらやがて気付きます事は建物だけではございません。このスタッフのジャンパーも白という。これはジャズストリート実行委員長の方の背中でございますけれども、なんとこの背中の中に私達は音楽をもって町の未来を構想しようという、そんな想像力の世界がここには宿っているという事に気付くわけでございます。交差点の対面、丁度銀行の前の辺りに目をやりますならば、そのベンチに座っている女の子も白い帽子という、なんとこの阿吽の呼吸で人々は心を合わせようとしているという、何の因果が働いているんでございましょうか。こうして白を白々しいというんでなく、清々しいってそういうこうイメージを持って人々はまといながら町を歩き、音楽を楽しみあっているわけでございます。街角には車いすからジャズを楽しむという、日常的にこのような事があって欲しいね、そんな願いが非日常的な出来事のイベントを通して、人々の心の中に伝わって行くとき、これは一回で終わらせずに何回も繰り返してやろう、そのうち非日常を日常に移していこう、そんな思いが音楽と共に人々の心の中に波動を呼ぶわけでございます。ここにおいて私達は白い壁面をほこっているバーボンストリート、ナンバーエイトーンルートは、なんとこの隣りの建物を見やりますならば、白い建物に赤いゲートが入っておりまして、ここにおいて私達はこのバーボンストリートは白と共に赤が正面という。白と赤のストライプの美しいユニフォームに身を固めているミュージシャン達。

合わせてこう、美しい丘がどのストリートからも望める、この岡崎ならではの丘のこんもりとした緑を背景にしながら、都心でありながらこのように緑と共存できるという、この岡崎の地形の恵みを背景にしながら人々はこの町にもう一度賑わいを取り戻そうと、賑わいを象徴としての音楽を籠田公園では外国人ジャズミュージシャンが見事な演奏を広げているわけでございます。こうした演奏に聴き入る市民の風情に注目してみますならば、手拍子だけではございません。足も鳴らしているという。そしてここにおいても何故か白と赤、白という、この白と赤の組み合わせにおいて人々は町を美しく装い、自らも楽しさを表現してみようという岡崎スピリットが見られるようにも思えるわけでございます。

またシビコの向いに変えてきますならば、昭和30年頃の建物でございましょうか、水平線を美しくグリーンで縁取りながら発展していく、近代の岡崎を象徴するような街角の建築がある時捨てられてしまいました。しかし今日バレンタインカフェという若者達が毎日ここにたむろする素晴らしい喫茶店が街角に再生しているわけでございますが、その街角のコーナー部分、ショーウィンドウを眺めますならば、ここにもバレンタインカフェのスクーターとそして白いミッテランの人形という、この白と赤の対比性を持って筋向かい眺めてみますならば、このジャズストリートは夕日を浴びながら一層輝きを帯び、人々の心の中にジャズとの解けあいの瞬間が現れてくるわけでございます。この影の鼓動の部分のみやりますならば、ユニフォームは真っ白、そしてそれに見入る子供達は赤いシャツを着ているという。何故かこの白いラインと赤い靴屋さんのラインという、ここにおいても思いがけない偶発的な岡崎的都市景観の美しさが露わになっていくわけでございます。隠されていた都市景観の美しい表情というものがこのように固い建物と人々の演奏と子供や大人達の振る舞いとまといいく姿の中に見られるわけでございますけれども、奏でられているマイルス・デービスの音楽に耳を傾けていく時、なんとこのようにトロンボーンは岡崎の未来は音楽の中に溶け込もうという夕日を浴びながらこのように楽器の花の咲くように未来の岡崎を映し込んでいくわけでございます。こうして人々は音楽に耳を傾けながら、心の中にこのように暮らしてみよう、岡崎の町をこんなふうになればいいなと夢は広がっていくわけでございます。

しかし、現実には厳しいものでございまして、壁はえぐり取られ次から次へと変貌を余儀なくされているのが現在の都市でございます。隣りははぎ取られてしまった事をめげずに佐谷さんというまちづくり協議会の会長さんの家はちゃんと自らの営業を明治37年からここで頑張っているという事を歌い上げながら、ここで音楽は聞こえてくるわけでございます。街角にはこのように何とはんまりとした表情が、この建物の表情に映し込まれているのでありましょうか。ミュージックという音楽の神なんでございましょうか、別なる神様なんでございましょうか、こうして岡崎の発展してきた経過を象徴する康生通りには、未来、岡崎は子供も年寄りも音楽も町も解け合うという、そんな解け合いをキーワードにしながら共に創造的な表現と活動の中に身を乗り出してみよう。その足下をまた歌い上げているシンガー、そしてそこを通りかかっている女性も手袋を白という、この大きな白と細部にも白が息づいているという、この白と赤の思いがけない組み合わせとそして次から次へと色んな表情が垣間見える、岡崎都心景観の魅力の一端を垣間見

て来たわけでございます。

垣間見るといふ点ではのちに見ます「リブラ」の建設現場の、工事現場を垣間見ているおっちゃんでございますが、まるでこれは穴を通して、この小さな穴を通して未来を見つめてみよう。その時一番大事なのは「まちにもっと創造力やで」という、今ある事にこだわるのではなくて、むしろ今をエネルギーにしなから未来を思い描くという、このイマジネーションという、この鮮烈なるキーワードがこの白い工事現場を覆う壁の中に赤の文字をもって描きとられているわけでございます。イマジネーション。創造力という人の体内に眠っている資源は創造力ではないか。創造力というのは難しい話ではございません。うちのまちはもうあかんねんと思うものも創造力。岡崎ってこんなもんやでと思うのも創造力。せやない、岡崎はこうしろ、こうありたいと思うのも創造力。どっちの創造力にけるんや。この工事現場が発するキーワード、創造力は私達にポジティブに積極的に未来に向かって能動的に生きてみようという、現実の苦しさを乗り越えていく創造力を資源に、肥やしにしなから、岡崎の未来と私一人ひとりの生き方を開いてみよう。そんな発想がこのジャズストリートの道のあちこちから聞こえてきているように当日思えたわけでございます。

図書館交流プラザ「リブラ」

さて岡崎は今ひとつ、まさに今覗いておりました工事現場では2004年から市民参加で新しい公共施設を作ろうという事で、始まりは2004年9月19日生涯学習拠点、後に図書館交流プラザ、今日「リブラ」と呼ぶ大規模公共施設が市民参加によって作られるようにしたわけでございます。冒頭、市長さんが新しい時代は今までの行政主導の波を超えて、皆さん方から批判もいただきながら積極的提言をいただき、行政、市民共に岡崎を育てていく「まち育て」の拠点をこの生涯学習拠点として作りたいと呼びかけられたわけでございます。流れは1年目は6階の基本設計ワークショップ、そして翌17年度は具体的な更なる進んだ実設計。そして昨年度18年度は管理運営ワークショップという3年度に渡る長い時をかけたのワークショップ、市民が自由にものを言いながら単なる言うっぱなしではない、提案に繋がるというそんな流れを生み出してきてわけでございます。少し時間をいただきながら、その経過を振り返り、皆さん方がこれから「リブラ」開館後、この場所を慈しみ、自らの茶の間として活用していただきたいという、その思いを膨らませていただくために、ちょっぴり長めに全体を振り返ってみたいと思うわけでございます。

1回目、不安は何かという事を全員が書き留めていきました。果たしてこの施設を作って、この廃れた康生に元気が蘇ってくるのか。ほんまかいな、そういう不安がよぎると共に、森の中で散歩をしたい、そんな気持ちと共にいま一つ注目すべきは、まだ設計に身を乗り出そうという段階で、どのように運営し、どのように育まれていくのか、この運営管理に市民参加をとということが初発においてつづやきとして提起されたのは、岡崎でのこの公共施設設計における重要な糸口を見いだしたわけでございます。ご承知のように岡崎城から大樹寺に向かっての世界にも珍しい都市軸の美しい軸線を活かしながら2.5ヘクタールという大規模敷地を活用して、この場所に図書館、そして市民交流、

文化活動が出来るホール等々を混ぜ合わせたものを作ろうとしたわけでございます。まずはただの議論だけはいかん。むしろ現場を探検してみよう。敷地、探検、発見、ほっとけんに赴いたわけでございます。建物の中で議論している時、雨ザーザー降りてございましたけれども、人々がみんなこのように敷地に赴き歩き始めますと雨がさっとやんだという。まるでこのプロジェクトが未来に輝くであろうという事を予見するかのごとき、偶発的出来事てございました。伊賀川にたたずみながら、伊賀川で水を眺めながら本が読める。伊賀川とこの敷地を繋ぎ止める開かれた図書館、開かれた文化施設、そして学びの場にしよう、人々は敷地探検、発見、ほっとけんの振る舞いを広げていったわけでございます。お気付きのように中学生達、城北中学校の子供達が毎回参加してくれたわけでございます。そしてこのような探検、発見、ほっとけんを専門家によって住民のつぶやきを子供達の子つぶやきをまとめてみなすならば、伊賀川の静けさと康生側の賑やかさを繋ぐという、いわば町と自然を結び合わせる新しい町の縁側のような建物をここに開いてみよう。そして大樹寺からのビスタラインを命のように大事にし、未来永劫景観の中に岡崎に住まう魅力を感じとろう。そんな空間構成の構図を子供達の発案を活かしながら、大人達の提案を活かしながら、この場所の構図を描いていったわけでございます。

どんどん回が進行していく中で、やがてこの建物の中には、どんな場所が寄り添い合うのか。図書館のこんな大きいものを、そして多目的ホール、そして国際交流などの交流の場、そのようなものが巡り会う時、中学生達の提案はなんと外堀りガーデンという、いわばこの岡崎城に隣接するこの地域の歴史的魅力を形として蘇らせよう、記憶を形態として蘇らせる。それは外堀りの形態をここに記す事によって、そして新しい市民のみんなのお庭という、外堀りガーデンという提案はなんとこの子供達がやったわけでございます。後に外堀りガーデンのコンセプト考え方は形の中に移されていくわけでございまして、こうして最初は何をしっかりとした建物になるかどうかわからへん。ぐじゃぐじゃの世界でございませけれども、未来はたゆまず、ぐじゃぐじゃの中から始まるわけでございまして、こうした子供の提案、やがて回を重ねてワークショップは進行していく中で、この場所は岡崎未来の広場にしよう。そして歴史による魅力を呼吸すると共に自然の魅力を呼吸出来、そして感動を表現するような場にして、子供たちがここで学校を超えて学舎にする。そしてここでたゆまず音楽を始め地域の歴史を紙芝居にしたり、多様な子供参加の活動を育てるといふ。そしてカフェでは本も読める。音楽を聴きながら内田修のコレクションに耳を傾けながら本が読める。そんな混ざり合いの美味しいおでんのような場にしていこう。大きい会場で議論をすると必ず大きい声の人しか発言しないという、心臓の強い人しか発言しいひんという、おとなしいもっとも素晴らしいアイデアを持っている方の意見が出ないわけでございますが、このように顔を付き合わせながらの全員発案の仕掛け、小さなテーブルに分かれるグループトーク、弾道不発の輪は全員からいろんな意見が出て、そしていろんな場所の形づくりの赴く前に、まずは何を指すんやという事を柔らかく語り始めていったわけでございます。大樹寺の山門を通して、この大樹寺小学校の子供達は毎日岡崎城をこう眺めているわけでございませけれども、ここにこうやってくる市民達が逆に大樹寺を眺める。岡崎城と繋ぐという、この

世界で誇るべき都市軸をこの建物の中に背骨のように入れながら、合わせて図書館と他の部分がどのように寄り添い合うのか。単純に壁で切るのではなくて、むしろ柔らかく子供達が提案した外堀りガーデンというコンセプトで、このように沈んだ東西に貫く伊賀川と康生通りを繋ぐようなストリートを太めに外堀りガーデン考え方で作ってみよう。A案、B案、C案、みんなで検討していったわけでございます。みんなの心の中を覗き、共感を呼ぶ合意のために、旗揚げアンケートなどもしながら、基本的にこの日各案の良い所を混ぜ合わせるという、設計者にとっては気が遠くなる程難しい提案がみんなからなされたわけでございます。こうしてA案を基調にしながら、AとCという、Bの良い所も組み込んでいくという、こういう流れの中で次の会合では一つの成案にまとめあげられていったわけでございます。

先程から申し上げておりますように、町と自然との繋がりの中に中間的な広がりのある開放的な「まちの縁側」のような居場所にしようという構図が生まれて、建物内部の平面図も間取りも詳細が築かれていったわけでございます。にも関わらず、この会場ではこれは予算ようけ使うからやめとけみたいな意見が飛び交っているわけでございます。ある先生はそんな意見は鼻つまみやみみたいなサインをこう送ってはるわけでございますけれども、しかしこの時、私達コーディネイターが対立する意見、行政批判を押し込んだわけではございません。この中に居られる市民の方が、私達はこのような狙いをもって、この大規模なる公共施設を新しい市民の居場所として、まちを元気にする仕掛けとして、そしてそれは単なる言葉だけではなくて、部会の活動計画や運営計画を立てる事によって、お金使うだけの値打ちがあるものを私達は作っていったのではないかという事で、先へ進む事が出来たわけでございます。こうして対立をエネルギーにしながら、形はどんどん進んでいったわけでございます。先程から触れておりますように、全体として新しい開かれた縁側空間のように、そして子供達提案の外堀りガーデンの柔らかい曲線を持って従来の堅苦しい公共施設のガチガチした雰囲気乗り越えながら、南側に開かれた道、空間、そして康生通りと伊賀川を取り結ぶような動線が見事に描きとられていく。198人入る小ホール。そしてジャズなどを演ずるスタジオ。2階の部分には内田修ジャズコレクション。1階はレファレンスライブラリー、2階はポピュラーライブラリー等々の空間構成がしっかりと建築的詳細を持って描かれていったわけでございます。しかし提案されたものに対して市民はそれで良いというふうにするなり受け止めたわけではございません。基本設計案に対して次から次への提案が各グループから出されていったわけでございます。この頃基本設計案から実設計案に移行していく中で、形づくりの基本的な枠組みはほぼ合意出来たわけでございますので、むしろ文化創造、交流、図書館、活動支援という4つの機能に分かれながら活動計画を作ろう。管理運営のあり方を考えよう。4つのグループに分かれながら例えば文化創造ゾーンの活用の仕方について本当に演劇も音楽会も出来る舞台になっているのか、そして音楽、コンサートを終えた後、パーティ空間がロビーで出来るかしら等々の使い方のチェックがなされていったわけでございます。全館くまなく活用出来るような場所にしよう。そして会館の時にこの場所がどのような市民の強い思い入れと身を持ち出した対応の中で生まれて行ったか。それをドキュメンタリータッチで、演劇に仕立てて、ミュージカルに

仕立ててここで発表しよう。こうして活動計画がいわばオープニングのセレモニーの象徴的なプログラム作りとして語られて言ったわけでございます。丁度そのような語り合いが、今皆さん方が居られるこの場所で発表されている時、まさにこのシビコの前のこの楠の櫓の広場の前では、若者達がこのように朗々と未来を歌い上げるジャズをロックを吟じていたわけでございまして、まさにここには市民のあらゆる層の中に音楽や対話やそして笑いや人間を内面から根底的に豊かにする表現、対話の世界をあちこちに広げようというそんな気運が盛り上がっていったわけでございます。笑い弾けるテーブルトークと共に毎回各グループのとじた話で終わったわけではございません。毎回最後にみんな発表しあったわけでございます。3年後、図書館活動は何を目指すんやという。アジアの言葉で絵本の読み聞かせをやってみよう。こんな活動は既に図書館クラブのメンバーによって実践が始まろうとしているわけでございます。この日発表の中で参加者の一人は、「こんだけ市民が熱い思いをもってこの図書館交流プラザに対する思いを語り、形を作り、それをどのように運営しようとしているかというのに、こんなに素晴らしい場を作られた岡崎市もすてたもんじゃない。我々市民としては今まで行政をいじめてきた傾向があるけれども、今後私達はいじめません。行政は仲間だ。」と彼は敢然と言ってのけたわけでございます。仲間だという限りは行政の代表の方はここで私達のこの熱い思いに答えて何か言うてくださいというふうに申し出たわけでございますけれども、その申し出に対してさっとタイミング良く、この康生計画の担当の責任者はさっと立ち上がりまして、「今までの語り合いというのはこれまでの岡崎に無かった。創造的な対話とそして皆さんの市民力を育む場として、私達の行政の者は極めて励まされる思いをし、これからもこのようなやり方を岡崎行政の中に、岡崎の町のあちこちに浸透させていきたい。私責任者です。」というのですと立ち上がりはったわけでございます。この鈴木シズオさんがなんと良く似てはりますが、この素晴らしい似顔絵、素晴らしい早業の記録。これは三矢勝司君という、この地域が生み出した全国で最も優れた若い世代でこれだけのハシイティションラデックスというのをやれる強者でございます。このラスワンの専門家が地元岡崎の中で育てられ、お互い育ち合うという関係が見えるわけでございます。こうして行政、市民、専門家、今日岡崎町育てセンター、「リタ」の事務局次長をやっている三矢くんでありますけれども、合わせてお母さん方は回を重ねながら、この図書館の国際交流と文化創造とバラバラになっているけれども、実はこれを媒介する活動を図書館交流部会はやっていきたい。媒介者としてミツバチ、市民は媒介、この場所はみつばちマーヤの物語が生み出されていくのではなからうか、そんな発想が人々の発表の合間にプレゼンテーション、表現発表を通して人々は自己の心の中に新しい生き方のエネルギーを沸き立たせると共に、形作りにおいてこのように極めて難しい複雑なる形を見事に一つのまとまりの中に埋め込み、しかしながら単なる箱ものをパズルを解くように解いたわけではございません。柔らかい川が流れるかの如き、歴史の流れがこのように建物の中に貫通し、この都市軸の軸線が縦に並ぶと共に、周りの開かれるような場所になろうとしているわけでございます。果たしてこの図書館プラザ「リブラ」がこのような市民の参加の中で働いていた思いが実現するんでございましょうか。この建物が「リブラ」として「リバティ」自由なる暮らしと交流と創造活動の場

にそして本の森の中に人々は新しい共用と知識を生きるエネルギーにしていくんでありましょうか。その行く末を知っているのは今日岡崎城のみであると、市民の方々は語っている今日この頃の岡崎でございます。

大門河川緑地

さて、矢作川はこのように大門緑地と称しまして、今日国土交通省が水辺プラザとこう称しながら、住民参加でこの川縁の治水工事をすると共に、市民の憩いの場、とりわけ次世代、子供達の為に川にもう一度寄り添えるような、川を生活空間に取り戻そうというワークショップが去年から始まったわけでございます。この場所、先ほどの敷地探検と一緒にございまして、まずは川縁をみんなで歩きながら日頃なかなか寄りつけなくなってしまった川の魅力、課題を現場で臨場感をもってみんなで探索をしていったわけでございます。ちょうど1年前1月15日という寒風吹きすさぶ中、野鳥がこの中洲に憩っているわけでございますけれども、このような川縁を歩きながら、この木は絶対残さないとあかん、住民達、お母さん方が言うてはるわけでございます。「なんでやねん。」とこう聞いてみましたら、かぶとむしがいっぱいくる木や。子供達がかぶとむしと戯れるという、この子供とかぶとむしを、そして川と媒介する緑、これは絶対守らないといけないという。単なる治水の為に切るというのが行政だけでやってしまいますとそうなりがちでございますけれども、このように住民参加の中では環境を熟知しておられる市民の方々がこの場所で残すべきもの、そして整備すべき内容についてかくりたいという克明なるメモを持って一人ひとりつばやきを寄せ合っていたわけでございます。サイクリングロードにしよう。車がビューと走らんようにバンプというちょっとこぶを作ってゆっくり走るようにしよう等々様々な提案がされていくと共に全体にスポーツ系の広場と自然と触れ合う広場、そして川に寄り添えるような水辺空間等々それぞれの場所の特性に応じてこの東西南北に長い川縁の整備のあり方をみんなで議論しあって行ったわけでございます。国土交通省の担当者に対して食い下がる住民、住民の方の所には極めて有力な子供や生活者の振る舞いの視点からの根拠がみなぎっておりまして、生活者の提案する根拠ある発言に国土交通省の方々が是非それは活かしたいと言いながら、この段階ではスポーツ広場から自然、親子、水辺、広場の一番端にラジコン広場が作られておりました。しかしながらラジコンを走らせていた、飛ばしていたグループから強い要望でラジコン広場が作られる案が途中まであったわけでございますけれども、法律に抵触する条件がその後見つかったわけでございます。法律に抵触する条件が見つかったがために、次回このラジコン広場は案から消え去ってしまいました。その時ラジコン関係者達から強い反発と強い非難の意見が囂々と現れたわけでございますけれども、この時子供達参加によって後の発表が待ち受けておりまして、子供は大人は何でこんな強い声で喋っておるんやろうみたいに、目を白黒させているわけでございますが、あるおっちゃんも敢然とたって法律に抵触するものはきちんと私達は守りながら、それを前提にして子供達の生活空間としての川縁のデザインをしようとするのが大事ではないかという事で、対立する渦を治めながらやがて子供の発表に赴いたわけでございます。大門小学校の子供達は総合学習の今日の日本全国どこでもやっている時間の中で、

最も優れた経験を紡ぎ出しているのではなからうかという、大門河川緑地の端にある既存の公園にこのような立体のジャングルジム、そして遊び場を作ろうという提案をしてくれたわけでございます。何とときめ細やかなる提案がなされているんでございましょうか。2階は風がゆったりと通っていく。3階の更にその上の屋上に昇ると矢作川の向こう岸の野鳥を望む事が出来るという、それぞれの階ごとに違った振る舞い提案がなされると共に、緑の蔭を活かしながらの梯子段の提案という、全体の構図と言い、細部に命が宿るような提案が小学校3年生の総合学習の成果と思えないような、現実的な提案がなされていったわけでございます。小学校1年生の子供達はなんとこのように花壇を作るように、単なる花壇ではございません。何故か80センチと2メートルという寸法をきっちり指定してきたわけございまして、このように単なる美しいものがあれば良いというだけではございません。80センチとか2メートルという数字とか寸法を学ぶという、このように花に対する感受性を呼び覚ますと共に、美しいものに対する愛でる心だけではございません。数理的なる心も同時に学び取るという、このような大門小学校の発表に目を細めている住民達でございます。スポーツ広場には僕のお父さんはテニスが好きだからテニスコートを作りたいと子供は提案したわけでございますが、何とこのテニスコートの青々としたグリーンなる緑濃い表現は物凄い心の中にバッタが居るやろうみたいなそういう提案が色濃くなされたわけでございます。こうした心のこもった提案はきっと実現するであろう、実現させたい、そんな思いが広がると共にやがて回を重ねていくごとにこのような子供の提案を活かす現実的な案が使えていったわけでございます。ある子供の提案はサッカーボールを蹴る時の壁を作りたい。最初は赤で塗り始めたら先生は、「君、赤だけでは絵の具もったいないから青にきなさいと。」言われたので仕方なく青にしました。でも何たる優れた構図なんでございましょうか。先ほどの赤と白ではございませんが、世界は対比的なるものの中に美しさを見いだすという、対比を対立と見なすのではなくてお互い仲間と見なし合うという、まるで行政と市民が仲間になろうというそんな思いがこの小学校1年生のサッカーボールの壁の中に表現されている。絵といえは些か言い過ぎかも知れませんが、しかしながらこの中に描き取られている、この遊びの光景たるもの子供ならではの優れた未来に対する思いの表現でございます。こうして岡崎は大人から子供まで何を目指すかという理念を大事にしながら、表現を通して具体の思いを共有しあっていく活動として綿々と多様な現場を紡ぎ出しているわけでございます。

そういう流れの中で昨年12月17日に、康生地区シビコ6階、空き空間でございますけれども、そこを活用しながら、「岡崎コミュニティデザインリーグ」、岡崎で学ぶ若い学生達が発表し、市民も先程からのワークショップの市民活動の成果を発表をしあっていたわけでございます。公開審査の場で若者達は自らの提案を発表し、審査員は縷々語り合いながら評価を通して若者達との出会いの場の世界を豊かに紡ぎ出していたわけでございます。こうした岡崎が誇る各大学の若者達が未来に向かっての提案は、先程からの現実的な公共施設設計だけではなく、康生を今ある宝物を活かしながら大きな再開発ではなくて、小さな宝物を次から次へと紡ぎ出すような、そんな岡崎ならではの魅力、宝物の小さなものを繋ぎ止めていくという、そんな素晴らしい提案が出されて

いったわけでございます。若者達の提案に心清々しい思いを私達は受け取ったわけでございますが、外を歩いていますならば、乙川がなんと気持ちの良い風をこの町の中に吹きおいをしているのでございましょうか。私達は川という町の景観を引き締める、いわば美しい背骨をもっともっと美しくすると共に、周りの町、そして人、そこに新しい時代の人の生き方と、町の生き方を重ね合わせるような方向感を共有する活動を岡崎では次から次へと広げていたわけでございます。

最後に以上を通して何が言いたかったかという事を申し上げますならば、最初は行政と市民の間、キャッチボールは何となく異物感があるような違和感がありました。しかしやがて市民各層いろんな人々が出会う場が生まれていったわけでございます。たぬきもいればきつねもおるがといる、非常に柔らかい発想するものもおれば、いろんな混ざり合いの中でまるでおでんのようにお互いぐつつ煮合いながらお互い美味しくなりあうという。まるでおでんのようなコミュニティ、おでんのような岡崎コミュニティを育もうというのが先ほどからの一連のワークショップの現場では声として聞こえてきたわけでございます。しかし単純に楽しい対話だけではございませでした。時には雷が落ちるぐらいの激しい批判とそして激烈なる対立が起こりました。しかし対立はそれで分かれるような構図になったのではございませ。むしろ対立を対話に変えると共に、トラブルをエネルギーに変える。雷の後には必ず西の世界が見えてくるのではなからうか。そんな時の流れに託しながら、人々は時代の深刻さを乗り越え、未来のあり方を構想するという提案、そして人と生き物と町が共に生きるという、共生の世界をデザインしていく所に私達は今日、市民がまち育てに能動的に参加する重要な意味があるのではなからうかという事に気付いていったわけでございます。とりわけ重要なのは次世代、子供達が未来の意志決定者であります。子供の視点から岡崎のまちの全体と共に、一つひとつの学区、一つひとつの道筋、一つひとつの家の前まで、身近な環境から大きな世界に至るまで子供の視点からまちを育もう。その事に生きがいを見いだすことに今後とも赴いていこう、そんなメッセージが一連の映像を通して私達に働いているように思いますが如何でしょうか。以上で「幻燈会」を終わります。

些か早口で駆け抜けてまいりましてお聞き苦しかった事をお詫びしたいと思います。さてこのまま終わりますと「あの人、わざわざ岡崎学に来て、ただ電動紙芝居見せて終わるんかいなと。お前いったい何を言いたいんやと。岡崎学とはえらい真面目にやってるんやぞ。」と後でお叱りを受けるかもわかりませんが、以上の話は個別の事例にすぎるかに思えながら、語りながら私は岡崎のまち育ての共通した方法論が見え隠れしているのではないかという事に今日のプログラムを作りながら感じました。そこで「岡崎まちそだて法」というものを描いてみたのが2つの円がグルグル輪っかになっているものでございます。この輪っかは、まさに最初は1は思いを呟き、振る舞いをそれぞれ自由に足させながら、私発であり、そして行政が言うからではなくて、自らのリズムで市民の作法をもって技術的な事を進めていくという最初の1は、この「私発・自立」。

最初は現実を巡る子育ての悩みとか、自然が身近な環境から失せていく危機感を語り合いながら、それを乗り越えていく夢を語り合いながら、堅苦しい会合ではなくて、軽

いノリで仲間の輪を広げながら、自分達で自分達の町を自立的に育みましょうよという共感を呼ぶ世界を広げながら対話と共同の世界に自由に赴くという、これが第2の段階、「対話・協働」でございます。今日この協働と書きますのは、従来 $1+1=2$ にならんと足引っ張り合いで2以下になるという、そういう協働が地域ではあるいは行政と市民の間では難易ではなかったでございますけれども、むしろこの協働というのは $1+1=2$ 以上、3にも10にもなりよるといふ。これが今日、市民と市民、市民と行政が共同する事の重要な意味でございます、いわばこの協働というのはお互い最初は気が合わん関係かもわからんけれども、そのうちお互い対話しもって楽しい活動をしていると相乗効果をもって $1+1=2$ にも2以上にも10にも100にもなりよるといふ、これが協働の相乗効果をはらむ岡崎方式の重要な一連の事例の中に全て含まれる視点でございます。

そうした対話と協働の流れの中で、やがて何を指すんやという目標と方向感を分かち合いながら多様な手法の検討を重ね、極めて斬新なる、そしてどここの町の真似事ではなくて岡崎ならではの公共施設や岡崎ならではの河川空間や岡崎ならではのジャズストリートなど楽しい活動と振る舞いと具体の空間が斬新且つオリジナルな内容提案に至り、未来に向かって自らの思いを形にする創造的行為が岡崎方式の第3の輪っか、「表現・提案」の意味する所でございます。

更にそれを実現条件を検討しながら、金なんぼいるんや、継続のための仕組みはどうするんやと、気配りとそして創意工夫に満ちた実践活動に流れていく事が今後予想されるわけでございます。今までの対話と協働の議論の中で、ひとりひとりが周りに気配りし、ひとりひとりが持ち得ているアイデアや技や創意工夫の持ち寄りの実践と、第三者的な評価、市民自らの評価、行政内部のコスト評価等々多様な多面的なる評価をし、自省し、反省をしながらその中で新しい方向感を生み出していく、それがこの輪っかの中の4の「実践・評価」です。そして新しい状況での新しい仮説からで元の1に戻るわけでございます。この「私発・自律」から「対話・協働」「表現・提案」「実践・評価」に至るといふ一連の流れをぐるぐる状況の中で螺旋的に次から次へと生み出されていきます。地域が変わり、テーマが変わり、状況が変わっても、この4つのキーワードの示す8の字型のぐるぐる構図は、いわば岡崎における創造的まちそだて方法論として、どこでも誰でもこの考え方を心に留めながら応用していけば、誰でもどんなテーマでもやれるのではないのでしょうか。

キーワードの「思いをつぶやき」「軽いノリで」「斬新」「気配り」の各項目の頭文字を丸打ってみますと、何故かこれは頭文字が「お・か・ざ・き」になっておりまして、夜寝る前にこの岡崎キーワードを呪文の如き唱えながらお休みになりますと、やがて今日おみせいたしました、あの生き活き子供、お年寄り、みんながまちに関わり、他者に関わり、川に関わり、未来に関わっていく事がどんなに豊かな生き方を育てていくか、人の生き方を豊かにする事がまち育てであり、一人ひとりが豊かな生き方を選択し、身を乗り出していく事が岡崎を隅々まで、そして未来永劫子供が岡崎に住んで良かったと、故郷と思える岡崎を創造する事に繋がるのではなからうか。故郷としての創造的な記憶を子供達の心の中に種まきしていく岡崎方式はこの岡崎の4つのキーワードを念じながら日々を実践していくというところに私が岡崎で学んだ、岡崎の皆さん方からいた

だいた、岡崎まち育て法は名古屋でも学んでいきたい。日本の各地域にも広げていきたいと思うような普遍的な今日を巡る新しいまち育て法を皆さん方は生み出されているのではなかろうかという事を申し上げたかったわけでございます。あちこちの状況を現場に即して大急ぎで映像を眺めてきましたけれども、皆さん方の心の中にひとつでもふたつでもあんな場面は活かしてみたいわとか、この言葉、このキーワードは今後活かしてみたいと、ひとつでもふたつでも心に留まる事がございましたら大変嬉しく思います。一生懸命聞いていただきましてありがとうございました。